

黒人研究学会会報

Japan Black Studies Association Newsletter No.95 (September 30, 2023)

第 95 号 2023 年 9 月 30 日

例会発表要旨

4月例会 2023年4月22日 キャンパスプラザ京都

- ① イェール、黒人研究学会とラングストン・ヒューズ:バイネッケ図書館の繋がり
Sabrina Williams (Yale University)

In what ways are Yale University, Japan Black Studies Association, and Langston Hughes connected? This paper focuses on Langston Hughes's trip to Japan and the web of connections that can be traced from his international experiences. Often, when Afro-Japanese history is discussed, the experiences of American soldiers in Japan during and following World War II come to the forefront. However, Afro-Japanese history begins centuries earlier and this presentation looks at one story in this long history, that of Langston Hughes's 1933 visits to Japan. This paper begins with his experience in the Soviet Union, the original impetus for the journey, continues with both his experience of and reflections upon his time in Japan, and concludes with the myriad of ways Hughes's story connects to that of Yale University and Japan Black Studies Association.

② 『Kindred』とその周辺—奴隷体験・SF・映画

風呂本 惇子(元城西国際大学)、柴崎小百合(城西国際大学)

風呂本 惇子・岡地尚宏による 1992 年の翻訳、オクテイヴィア・E・バトラー作『Kindred』が 2021 年に新たに文庫本として出版された。本トークは、柴崎が作品やその周辺について質問し、風呂本が答える形で行われた。

作品との出会い、翻訳の理由、苦労点、についてのトークに続き、1979 年 *Kindred* が世に出た際、奴隷制時代にタイムスリップするといった書き方に反発や批判はなかったのか、という質問には、そのような批判を読んだことはないと言いきつつ、初めてバトラーを紹介した 1989 年のアメリカ文学会東京支部におけるシンポジウムで、「なぜなじみの薄い SF 作家を取り上げるのか」といぶかしがられた経験が語られた。また、「焦点が人種問題になるから黒人は登場させない方がいい」といった SF 作家たちの姿勢や、重いテーマをリアリズム路線で引き継いでいた当時の黒人作家たちの風潮についても言及があった。

デイナの夫ケヴィンを白人男性に設定したことについては、夫婦の人種的な立場やものの見方の差異を指摘しつつ、公民権運動の分裂した 1970 年代を考慮に入れ、「理想を共有して共に闘う人であるなら人種にはこだわらない」バトラーの信念の表明でもあった。

「デイナが腕を失ったことに象徴的な意味があるのか」という質問には、失ったのは左腕だが、彼女が左利きだという記述はどこにもなく、最終稿以外は手書きで書く作家という設定なので、右腕が残されたのは体験を書き残す任務を果たすためであろう、という答えがあった。しかし、身体の他の部分でなく「腕を」失ったことに対する直接の答えにはなっていないので、新たな解釈の出現が期待される。ナマ身の傷痕は、デイナの体験が幻想ではなく過去とフィジカルにつながる証となり、それは「現在」がいずれ「過去」となったときも「未来」につながるといふバトラーの主張になっていく。その主張は「腕」の意味を探索中に出会った 80 年代の短編“*Speech Sounds*”と 90 年代の長編 *Parable of the Sower* にも感じられた。前者では疫病による、後者では気候変動と水不足が主因の、ディストピア的未来が充分ありうる話としてリアルに描かれる。だが荒廃の一途をたどる環境の中で、他者を思いやる気持ちが仮の家族やミニ・コミュニティの構成を促し、かすかな希望につながってゆく。ここに作者の「想像力を精一杯働かせて、どうすればよりよい未来を作れるか考えてほしい」というメッセージがこめられている。『Kindred』でも、過去に拉致されたデイナとケヴィンが「すでに起こったこと」として諦めるのではなく、よりよい未来を作り出すためにルーファスの精神教育やナイジェルの識字教育に力をそそいでいた。「黒人文化のレンズを通して、起こりうる未来を創造する方法」(ウィマック著、押野素子訳『アフロフューチャリズム』)もアフロフューチャリズムの一つなのである。

なお、『Kindred』は 2022 年、『Kindred—時間を越えた絆』のタイトルでネット配信用のドラマとして映像化された。これについては柴崎が、近年単なる奴隷体験記ではなく、それに改変を加えた映像作品(たとえば『アンテベラム』など)が目立っていることを指摘した。風呂本の感想は「拉致されて戻れない者の恐怖が強調されている」というものであった。

会員からの投稿

ジャマイカ、キングストンの死者のいるコミュニティ

神本秀爾(久留米大学)

2019 年頃からうっすらと死について考え始めるようになった。正確には「死ぬこと」について人類学的に考えてみようと思うようになった。動機は色々あるが、ひとつはこれまで多くの人の経験しないマイナーな事象を検討の対象としてきたことにあらためて気づいたためである。長期の参与観察を信条とする人類学的な調査を経験したひとなら大抵は、調査地における死について考える機会に出会うはずである。私の場合はおそらく、人生の半分以上付き合ってきたラスタファァーライにおいて死が忌み嫌われてきたことが大きく関係していて、死についてはほとんど考えることがなかった。

キリスト教の天国は白人たちが黒人に隷属状況を受け入れさせるためにでっち上げた嘘だとして、現世を生き切るというラスタの発想は潔い。だが、物理的に全ての私たちの肉体は死を迎える。ラスタの場合も言うまでもない。そして、他者の手を借りない死はほとんど存在しない。遺体の処理の段階になればなおさらである。そのあとで幸運なら誰かしらの生者に短期間は記憶され悼まれる。このような、誰もが必ず関わる死について考えることはおそらく自分の生を豊かにもするだろう。そう考えて 2019 年の 9 月に調査を始め、コロナ禍を挟んで 2023 年の 3 月と 8 月の計 3 回ジャマイカでいずれも短期の調査をおこなった。

近年のジャマイカで流行している葬送の概略や、故人の生をバイクや家を模った墓石に抽象化するデザイナー墓については本会の会誌 89 号(2020)、91 号(2022)でも報告してきた。そこで、ここではこの 8 月におこなった死者を描いた壁画(memorial mural)についての調査を通じて考えたことについて少しだけ書いてみたい。

最近でこそ陸上選手への注目も高まっているが、一般的にジャマイカと言えばレゲエ音楽であり、街の至るところでレゲエ・ミュージシャンの壁画やイラストを目にすることができる。その一方で、インナーシティ沿いを車で通っていると全く知らないジャマイカ人の壁画を見ることがあり以前から気になっていた。現地のひとに聞くと古いものは各エリアのギャングのボスのようなひとのものがほとんどだと言うが、最近はそうでないひとのものも描かれていると言う。2023 年 8 月 26 日、首都キングストンの南西側のコックバーン・ペン周辺を車や徒歩で壁画を探して回った。コックバーン・ペンはインド系住民が多いエリアで 90 年代にアメリカを拠点に活躍したレゲエ・シンガー、スーパーキャットの地元でもある。この日はエリアに住む画家を訪ねて行ったのだが会うことはできなかった。その代わりに通りがかったコミュニティの顔役の息子が壁画を紹介してくれると言うので付いて行くことにした。

このエリアでは 10 数点の壁画を確認することができた。この日に別の場所で確認した 10 数点を含めての壁画に関する簡単な分析は以下の通りである。①男性のものの方が女性のものより多い。②男性は若い死者のものが多く若い女性のはひとつもない。③男性のものは通りに面した壁やバーの壁にもあるが(写真1・2)、女性のは家の壁であることがほとんどである(写真3)。

壁画にまつわる個々人のエピソードを全て集めたわけではないので推測だが、しばしば暴力的な衝突も起きるエリアであることから殺された男性のものは少なくないと考えられる。抗

争は個人どうしというよりもコミュニティどうしの規模で進み、その死は突発的であることがほとんどだろう。そう考えると①②のような状況が生じることについては納得しやすい。③については、女性はコミュニティの成員である前に家族の成員であると考えられていることや、場合によっては家族の中心にいるという感覚が強いのが原因かもしれない。“Legendary Mama Berta”と書かれている壁画はそのことを示唆しているように思える(写真4)。



写真1. 早すぎた男性の死者の壁画



写真2. 店の壁に描かれた男性の死者の壁画



写真3. 家の壁に描かれた女性の壁画

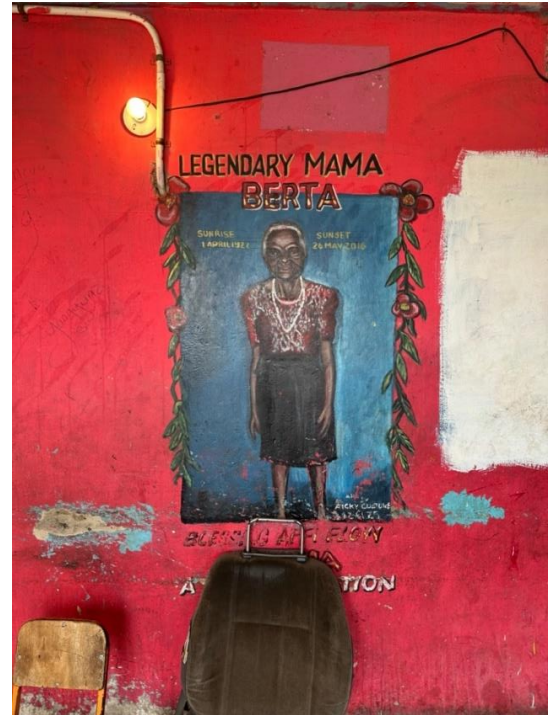


写真4. 94歳の長寿女性の壁画

壁画に関する調査はまだ入口に立った段階に過ぎず、成果を論文としてまとめることはな
いような気もしている。しかし、この日の調査で実感したのは死者が身近な生活がそこにある
ということである。これまでの私の人生にも他者の死は当然あったが、その死はコックバー
ン・ペンの壁画のようにコミュニティに開かれたものではなかった。たとえ葬儀に参列しその後
墓参りに行ったとしても、死は家族に属する領域であるように私には映っている。

コックバーン・ペンのひとびとは日々、かつてコミュニティで生きた一部の死者の存在を感じ
ながら生きている。死者の壁画は良い記憶ばかりではなく嫌な記憶を思い出させることもあ
るだろう。ただ、「生きているものだけでこの世は成り立っているわけではない」というチェスタ
トンの言葉を思い返すならば、死者を身近に感じるこのコミュニティには生々しい生が充満し
ていることを想像させる。

最近の関心について

西あゆみ(九州大学)

今年度から就職のために縁もゆかりもなかった福岡市にやってきた。赴任前に物件の内見ついでに大濠公園を歩いてみると、風を受けてはためいているような青いアートに足が止まった。ナイジェリアにルーツを持つイギリス人アーティスト、インカ・ショニバレ CBE の作品『ウインド・スカルプチャー』だった。アフリカ系の作家に関心をもって研究してきたので、この街で働くことが楽しみになった瞬間だった。



[写真]インカ・ショニバレ CBE《ウインド・スカルプチャー(SG) II》、福岡市美術館、筆者撮影

さて、2022 年春に提出した博士論文では、J. M.クツエー、ナディン・ゴードイマ、ゾーイ・ウィカムの3人の南アフリカ作家が、いかに人種、性、階級、障害といった差を超えてつながるための思想をつむぎ出すか、フェミニズム理論を参照しながら考えた。

そして博論提出以降、最近ではイギリスへのアフリカ系移民女性の作品や彼女たちのブラック・フェミニズムにも関心を持ちはじめている。

これまで、主に南アフリカの「白人」作家が、解放運動における自らの立ち位置について深く思考する作品に惹かれてきた。しかし、同時に、そのとき「他者」とされる黒人女性の視点から描く作家は、これまでどのような文体や戦略を用いてきたのか、彼女たちの作品はどのように受容されてきたのだろうか、とも考えるようになってきた。

ゾーイ・ウィカムが移住先のスコットランドと南アフリカをつなぐ作品を続けて出版していることや、2022年の夏に念願だったエディンバラ演劇祭に参加し、ナイジェリア系イギリス人俳優 Adua Onashile が主演するナショナル・シアター・オブ・スコットランドの作品(Liz Lochhead 脚本 *Medea*)に感銘を受けたことも、イギリスで活動するブラック・アーティストについて知りたくなったきっかけとなった。

そこで最近では、Buchi Emecheta や Beryl Gilroy が語るイギリスへの移民経験、Lochhead のあとにスコットランドの桂冠詩人となった Jackie Kay、2019年にブッカー賞を受賞し注目が高まっている Bernardine Evaristo などの作品を集中的に読んでいる。Evaristo はペンギン社と組んで、「Black Britain, Writing Back」シリーズを立ち上げ、黒人作家による佳作を再版している最中なので、読みたい本のリストはふくらむばかりだ。

さらに、Kay も Evaristo も、1980年代からブラックであることとフェミニズムを意識的に繋げ、小説を発表する前から、演劇や詩に表現してきた。博論執筆の過程で、個人の内面や成長を描く小説の形式と、人種差別や女性の抑圧の是正という集団的大義を書くことのあいだの緊張関係という課題が見つかった。それでは、イギリスに移民した女性たちの作品は、その観点からみたときどう読めるだろうか。また、移民 1 世の作家が描くフェミニズムと 2 世以降のそれには思想、戦略、文体にどのような違いがあるだろうか。

いまはまだ考えはじめたばかり、読みはじめたばかりで問いしかない状態だ。『黒人研究』バックナンバーをあたる必要もあるだろう。各時代のフェミニズムの議論や運動に関する言説を整理し、ブラック女性がそのなかでどのような役割を果たしてきたか、どのような点で排除されてきたか、調べることもしたい。しかし、今はなによりも、同時代の批評家や編集者には評価されなくても、ユーモアをもって書き続けてきた作家たちの多様で力強い作品をじっくり読む幸せを味わっている。



[写真] インカ・ショニバレ CBE《桜を放つ女性》、福岡市美術館、筆者撮影

『特別企画 70 周年語り継ぎプロジェクト』

来年 2024 年に当学会が発足から 70 年を迎えるにあたり、過去の空気感や人の感触が伝わってくるような会員の方々の思い出話を、今回の会報から来年度の会報にかけて、数人ずつ掲載することにいたしました。なお、掲載順は五十音順としております。

『黒人研究の会』入会前史

加藤恒彦(立命館大学)

「捨てる神あれば、拾う神あり」。若き研究者として歩み始めていた二十歳過ぎの血気盛んな頃の私を振り返って、よく思い浮かぶ諺である。

まず、文学への関心という意味では、中学生の頃から、自分の生き方への関心から、ドイツやフランス、ロシアの翻訳文学を読みふけり、高校に入ると英語が得意であったことから英米文学を原書で読むようになった。他方、社会科の先生が授業中に「君らが大学に入れば学生運動に出会うだろうから『共産党宣言』位は読んでおくんだね」と言った言葉が耳に残り、神戸外大に入るとマルクス主義の古典を読み漁ったが、『資本論』を読まないと本当のことはわからないと思い、一回生の秋に翻訳で第一巻、第二巻、そして第三巻の途中まで読み進んだ。他方、自治会運動にも参加し、クラス討議をリードし、二回生になると自治会委員長として活動。次の年の秋、朝、学校に行くと学校が全共闘によって勝手に封鎖されていた。そして驚いたことには、日頃からクラス討議を活発に行い、自治会に意見を反映させていた私のクラスの学生は、自主的にクラスに集まり、封鎖に抗議することを決め、校庭をデモしていたのだ。それにも勇気づけられ、私も拡声器を持って全共闘の蛮行と真っ向から闘った。

そうした経験を背景に私は、大阪市立大学の大学院を受験。面接で、「何をしたいか」と聞かれ、「日本の英文学会を変えたい」と発言した。というのは、その当時の英文科での文学研究は、アメリカのニュークリティシズムに支配されていて、文学の命とも言うべき、その社会的内容を排除していたからだ。そんな過激なことを言っても引き受けてくれた先生方の懐の深さには、今でも感謝しているのだが、それが、二年目の終わりには、「もう君の面倒は見切れんよ」という担当の長老教官の言葉となり、受験した博士課程の試験にも落とされ、人生の一大危機に直面したのだった。そんな時に私を救ってくれたのが、法学・経済学研究科院協の友人たちだった。私は、文学部院協の委員長になっていて、院協関係の横のつながりで彼らとも親しくなっていたのだ。そして、彼らは、県立高知女子大学の英語教員の公募があること、そして大学の改革に積極的な若手教員を先方は求めているという情報を教えてくれたのだ。私は、それに応募し、採用された。

他方、黒人文学との出会いという意味では、神戸外大の一回生の英語の授業でリチャード・ライトの短編を読み、その迫力に圧倒され、他のライトの作品やヒューズやポールドウィン等の作品等、黒人文学の世界にも惹かれつつあり、故古川博巳先生のご著書等を通じ『黒人研究の会』の存在も知っていた。しかし、学部生当時の私には、黒人文学は重すぎた。しかし、高知女子大学の講師になる頃には、黒人文学をライフワークとして取り組もうと思えるようになっていて、次の年の 1974 年に入会することになったのである。

黒人研の思い出

木内 徹(元日本大学)

私は1977年11月、24歳のときにリチャード・ライトの『ブラック・ボーイ』を一気呵成に読んで、アメリカ南部にこれほど過酷な黒人に対する人種差別の世界があるとは愚かにもまったく知らず、それまでアメリカという国に対して持っていたイメージを破壊され、このリチャード・ライトという作家の生涯を探究しようと決意した。私のアメリカに対して持っていたイメージはユージン・オニールの戯曲やアースキン・コールドウェルの小説に描かれるイメージだった。

私はその後、1979年に池上日出夫・伊藤堅二・須田稔・田中礼『アメリカ黒人の解放と文学』(新日本出版社、1979年)を読んで、黒人研究会(現在は黒人研究学会、以下、黒人研と略す)というアメリカおよびアフリカの黒人研究専門家が集まる会があることを知って早速入会した。1979年版の会員名簿に私の名前はないが、1980年版には私の名前があるので会員として認識されたのは1980年である。『アメリカ黒人の解放と文学』の著者のうちの一人である須田稔氏とはその後、黒人研の会合でしばしばお会いし、池上日出夫氏と伊藤堅二氏とは黒人研の会合で一度だけお会いした。黒人研入会から現在まで43年が経過しているが、そのあいだ私の研究生活は常に黒人研とともにあった。

そして入会翌年の1981年にはまだ大学院博士課程の学生だったが、「リチャード・ライトの『ブラック・ボーイ』と『アメリカの飢え』について」というタイトルの論文を黒人研の紀要『黒人研究』第51号(1981年)にさっそく掲載してもらっている。これは稚拙なものだが、私の書いたものが初めて活字になったものでとてもうれしかった。

1985年は、ライトが1960年に逝去したので没後25周年であり、ミシシッピ大学助教授マリエマ・グレアムが世界のライト研究者をミシシッピ州オックスフォードの同大に一堂に集めて、11月に「リチャード・ライト没後25周年記念国際シンポジウム」を主催した。私はこのとき大学で教えていたが、海外の学会に初めて出席し、帰国後の12月21日に、神戸市外国語大学で行われた黒人研の例会でこの学会の報告をした。このころ、神戸市外国語大学はまだ坂道の多い神戸市須磨区にあり、その翌年の1986年に研究学園都市に全学移転した。まだ33歳だった私はいつかライトの国際学会を黒人研の力を借りて日本で開催したいという夢を持つようになった。

その22年後、私は2008年6月、広島女学院大学で行われた黒人研の第54回年次大会で、ライトの遺児であるジュリア・ライト氏と、またライトの孫であるマルカム・ライト氏らを基調講演者として、「没後25周年記念国際シンポジウム」の主催者マリエマ・グレアムを奇しくも講師として逆にお招きし、ライトが1908年生まれであることから「ライト生誕100周年記念シンポジウム」を主催して、夢を実現することができた。人生で夢を一つでもかなえることができた私はつくづく幸せ者だと思う。

「シアトルにて」

風呂本惇子(元城西国際大学)

私の会員歴は半世紀以上だから、会を起点としてお世話になったたくさんの方々のうち、すでに故人となられた方も少なくないのだが、思い出すたびにその時のお声や表情までも鮮明によみがえってくる交流の場面がいくつかある。1992年の11月下旬にシアトルで開催された全米・アフリカ学会(ASA)に会からパネルを出すことになって古川博己・赤松光雄両先生と一緒したときの記憶もその一つである。「アフリカの独立とアメリカ黒人革命が日本における黒人研究に与えた影響」というパネルで、私は60年代以降の文学研究に的を絞って発表した。私自身、かつては「そういうことをやっている人ではちょっと・・・」と言われていたのが、「そういうことをやっている人だからこそ来てほしい」と言われるようになり、風向きが変わってきたのを肌で感じていたので、翻訳業界や学界の実態を数字で確認してみたくなり、(コンピューターの一般化前の時代だから)いくつかの学会事務局で資料を調べたり、書誌の編纂を予定しておられた木内徹先生にご協力をいただいたりしてなんとか原稿を用意した。

パネルの正式な報告は『黒人研究』63号に載っている所以で詳細は省こう。私の記憶は「食」にまつわるものだ。古川先生は、一日目も二日目も夕食は学会場でもあるホテルに近接したKFCで手早く済ませ、すぐ部屋にこもって原稿の推敲に集中することを選ばれた。それほど生真面目ではない私は、「せっかく港町に来たのだからシーフードくらい食べたいのに」と内心おもしろくない。二日目は思い切って赤松先生と司会役の加藤恒彦先生(ちょうど在外研修で滞米中)を誘い出し、ロブスターだったかカニだったか、ともかくお目当ての食べ物にありついた。あとで古川先生が私の原稿にまで目を通して細かいチェックをなさっていたとわかり、いささか罪悪感を抱いたものだ。最終日に発表がすむと、さすがの古川先生も午後には私たちと共に外出された。ちょうど映画『マルカム X』の封切り直後で、書店ではマルカム関係の図書が山積み、キオスクではマルカム・グッズが満載だった。私たちの行った巨大なシネマ・コンプレックス内のほぼ全ホールがこの映画を同時上映していたことにも、終わったとき満員の観客が拍手したことにも驚いた。

もう翌々日には日本へ帰るのだが、「加藤さんはまだ当分日本食が食べられないから」とか口実を作って、わざわざ和食の店を探し、四人でこころゆくまで映画の感想を話し合った。加藤先生とはここで別れ、我々三人は乗り継ぎのため、翌日サンフランシスコへ。その日の晩はホテル近くのパブで軽食をとった。アコーディオンが中心の小さなバンドが聞き覚えのある歌曲を弾き始めると、なんとまあ！あれほど生真面目だった古川先生が満面の笑顔でバンドの演奏に手拍子を打ち、ハミングまでして、赤松先生にも「一緒に歌おうよ」とさかんにそそのかすのである。(赤松先生はちょっと気恥ずかしそうにしておられたが・・・)古川先生も赤松先生も、会の創設にかかわりその後の人生を会の発展に尽くしてこられた方だから、会への責任感にはなげじゃない。オープニングセレモニーで我らの会が表彰され、古川先生は返礼のスピーチもされた。それやこれやで、かなり緊張されていたのだろう。ストイックな食選びも先生がかかえておられた使命感の現れだったのかもしれない。会の紹介や日本の黒人研究の実相の報告など、入念かつ周到に用意された発表をぶじ終えて、よほどほっとされたのか、帰国を前にし緊張が一挙にほぐれたかのようなあのはしゃぎかたは、今も忘れられないほほえましい思い出だ。

入会者

外岡 尚美(とのおか なおみ) 青山学院大学

山田 平(やまだ たいら) 明治学院大学院

編集後記

今回よりこの会報の編集担当をさせていただくことになりました。なにかと不備な点もあるかと存じますが、より充実した会報を目指してまいります。

今回の会報発行にあたってはさっそく、様々な会員の方々にご助言いただきました。まず、『特別企画 70周年語り継ぎプロジェクト』を無事にスタートすることができ、大変嬉しく思います。ご執筆いただいた加藤氏、木内氏、風呂本氏にはこの場を借りて感謝申し上げます。来年度いっぱい、掲載は続く予定です。ご寄稿くださる方はご一報いただければ幸いです。また今回の『会員からの投稿』欄には数枚の写真も掲載されており、視覚的にも彩り豊かな会報が出来上がったのではないかと考えております。ご寄稿いただいた神本氏、西氏にも感謝申し上げます。

随時会員のみなさまからの原稿を募集いたしております。学会発表や留学などされた際にはぜひ、またご意見などもありましたらぜひ河野までお寄せください。

(河野 世莉奈)

<編集> 黒人研究学会・編集部
〒839-8502 福岡県久留米市御井町 1635
久留米大学文学部・神本秀爾研究室気付

<編集者> 河野 世莉奈
serina.k529(a)gmail.com
ホーム・ページアドレス
<https://kmmstshuji.wixsite.com/jbsa>